

ストラウドとクワイン

—underdetermination から導き出されることは?¹—

成瀬 尚志

ストラウドとクワインの議論で興味深いことは、両者がともに underdetermination (以下 UD) を認めながらも、そこから導き出す結論が正反対であるという点である。クワインにとって UD が示していることは「世界を思い描く様々なやり方がある、そのどれもが擁護可能だ²」ということであり、世界の知識についてストラウドのような悲観的な結論を引き出してはいない。経験を上手く処理することさえできれば、どの理論も世界の知識を提供しているとクワインは考えるのである。

「理論」ということばで「まっとうな科学理論」しか思い浮かばないクワインにとってはそれで十分かもしれない。しかし、ストラウドが UD から懐疑論を引き出すのは、「私は夢を見ているかもしれない」という懐疑論的仮説 (以下 D 仮説) までもが容認されてしまうということが念頭にあるからである。この D 仮説を排除できない限り、現行の科学理論を信頼することはできないとストラウドは考えるのである。D 仮説が UD から導き出され、排除できないというストラウドの論証自体には問題がなく、おそらくクワインも認めるだろう。

ではここで D 仮説について考えてみよう。D 仮説の「我々は夢を見ているのかもしれない」という見かけ上のインパクトに惑わされないようにしよう。というのも、D 仮説は UD から導き出されている以上一つの理論であり、我々のこれまでの経験を上手く説明できるだけでなく、未来の経験についても現行の科学理論と変わらない程度の予測力を持っているからである³。もしそうでないなら、D 仮説は UD から導き出されるオルタナティブの一つとはなり得ないはずである。D 仮説が現行の科学理論と異なるのは、それが現行の科学理論には還元できない理論語 (おそらく「夢」や「実在」という語) を含んでいるという点である⁴。しかし両仮説が経験的に等値である以上、その理論語は現行

の科学理論の予測に何ら付け加えはしないのである。

ここまでの議論は両者とも認めると思われる。しかし、このD仮説に対してどのような態度をとるかに関して両者は大きく異なることとなる。クワインにとってD仮説は現行の科学理論の予測に何ら新たな予測を付け加えるわけではないので、不必要に煩雑なだけである。したがって、「単純性と経済性を目指す科学者の要求と齟齬をきたす」というプラグマティックな理由でクワインはD仮説を排除するだろう⁵。クワインにとって経験の説明において差のない理論は、世界に関して同程度にしか語っていないので、あとは便利かどうかで好きな理論を選択すればよいことになる⁶。

一方ストラウドはD仮説が排除できないことを重く受け止める。そのことから彼がクワインのように世界の知識を経験のレベルで説明することができるとは考えていないことがわかる。このように両者は、世界の知識の説明を経験のレベルで行うことができるかどうかという点で相違していると(当然ながら?)言える⁷。よってどちらの説明が世界についての説明として適切なのかが問われるべきことなのである。

「経験のレベルで知識を説明する」ということを具体的に述べると、経験的証拠に基づいて生み出されるところの科学理論や信念といった投射(projection)によって世界の知識を説明するということである。クワインの自然化された認識論のセッティングにおいては、我々はすべて投射しか手にしていないことになるが、それでもなお我々は世界の知識を持っていると言える、とクワインは考える。しかし、ストラウドは投射を手にはしているだけでは知識を持っていると言うには十分ではないという。

被験者が知識なり、真なる信念なりをもつことはどのようにして可能であるかを説明するために、私が知らなければならないのは、被験者の信念が何であるかということと、被験者の信念が向かっている先の世界において何が成り立っているかということである。そして私は、被験者の信念が何であるかをただ知ることとは独立に、私自身も世界に関する知識を手に入れなければならない。⁸

被験者の信念が正しいかどうかを判定するためには、その信念とは独立に、世界に関する情報を手にしていなければならないというストラウドの分析はその通りである。我々の信念の中には真であるものと偽であるものがあり、その全てを信用することができないからである。しかし、ある信念が正しいかどうかを判定するために、その信念とは別の信念を用いることはできないのだろうか。その点に関してストラウドは、我々すべてが投射しか手にしていないような自然化された認識論のセッティングのもとで次のように考察している。

私がおの場合に立っている場所からは、被験者の信念は単なる投射にすぎず、本当は真ではない、ということが言えるわけでもない。私はそのことを見定めることもできないのである。要するに、私が立っている場所は、被験者の信念を単なる投射以上のものと見てとることができない場所なのである。⁹

この引用から、ある信念を判定するために別の信念を用いることはできないとストラウドが考えていることがわかる。ストラウドがそのように考えるのは、最後の一文からわかるように、知識とは投射以上のものである、つまり、投射とは別の身分のものであると考えているからである¹⁰。このように、世界の知識に関して両者のとらえ方は大きく異なっている。クワインは、投射それ自身が世界の知識になると考え、一方ストラウドは、世界の知識とは投射とは異なる身分のものであると考えているのである。この前提の違いから、両者が UD から導き出す結論の違いが生じるのである。ここで問題なのは、この前提の違いはそれ以上議論を許さないようなプリミティブなものであるかどうかということである。少なくともクワインはそのようには考えない。たとえばクワインは主著『ことばと対象』の最後を次の一節で締めくくっている。少し長いがそのまま引用する。

したがって、哲学者の仕事は、細部では他の人々の仕事と異なっている。しかしその相違は、哲学者を、かれの引き受ける概念枠の外の有利な位置に立つものとして考える人々が言うほど、はなはだしい相違であるわけではない。そのような宇宙的亡命などありはしない。哲学者も、(いずれにせよ同様に

哲学的吟味をする必要のある) なんらかの概念枠を持ってその中で作業するのでなければ、科学や常識の基本的な概念枠を研究し、これを改訂することができない。哲学者は、内部からなら、整合性と単純性に訴えて体系を吟味し向上させることができる。だが、これは理論家一般の方法である。哲学者は意味論的昇階(semantic ascent)という手段を有するが、それは科学者も同じである。そして、理論科学者がはるかな道程において、非言語的刺激との究極的な関係を保持しなければならないのなら、哲学もまた自分のはるかな道程においてその関係を保持し続けなければならない。確かに、存在論的問題に決着をつけるための実験など、とてもありそうには思われぬ。だがそれは、そのような問題が、かくも多様な仕方で、かくも複雑な介在する理論の道を通して、感官面での刺激と関係しているからにすぎないのである。¹¹

ここでクワインは我々の概念枠の外側に出て世界を記述したり、存在者を特定したりすることはできないと述べている。つまり、信念や理論といった投射の外側にある「世界」や「実在」という概念自体が維持できないものであると論じているのである。このことは、この著書が論じてきたことから帰結する結論であって前提ではない。クワインはそうした考えが維持できないものであるということ、『ことばと対象』に加え、「なにがあるのかについて」、「経験主義の二つのドグマ」、「同一性・直示・物化」、「存在論的相対性」、「措定と実在」などに代表される、言語と存在に関する議論の中ですでに論じている。論文「自然化された認識論」は、それらの議論を前提にして自然主義を実行したものであり、自然主義を正当化する議論ではない。

もしクワインの主張が正しければ、ストラウドの考えているような「我々の信念とは異なる身分としての世界の知識」という概念はそもそも維持することが困難なものとなる。なるほどそのような世界というものを我々はどうにすれば知ることができるのかという問いに、懐疑論者であるストラウドは答える必要はないかもしれない。しかし、我々の信念や言語とは独立の(あるいは無関係の)世界ということでストラウドが何のことを意味しているのかは少なくとも明らかにする必要があるだろう。そうした考えが維持可能であることを示して初めて、クワインを批判するための立場を確立することができるのであ

る。

註

- ¹ 本原稿は 2007 年哲学若手フォーラムで開催されたワークショップ「ストラウド vs. クワイン—ストラウドのクワイン批判をめぐって」における発表を修正し、短くまとめたものである。また土屋氏の議論に対する応答の意味もあるので用語などの細かな説明は行わないことにした。詳しい議論は成瀬(2007)を参照されたい。
- ² Quine, (1992), p. 102 (邦訳 152 頁)
- ³ もちろん D 仮説では、我々が経験していると思っている世界の事象は全て夢の中の話なのであるが。
- ⁴ Quine, (1992), p. 98 (邦訳 146-147 頁) 参照。
- ⁵ Quine, (1992), p. 99 (邦訳 152 頁) 参照。このように自分が採用している理論だけを真と見なす立場をセクト主義と呼び、二つの理論をととも真と見なす立場をクワインはエキュメニズムと呼ぶ。クワインはどちらの立場をとるか決めかねていたが最終的にはセクト主義に落ち着いた。Quine, (1998), p. 685 参照。
- ⁶ つまりクワインにとって D 仮説は世界についての不便な理論 (知識) なのである。
- ⁷ クワインは「ストラウドへの返答」の中で、ストラウドの議論を受けて、現行の科学理論がうまくいかなくなる可能性を想定している (Quine, (1981), p. 475 参照)。その想定はクワインにとってはかなりラディカルなものであるが、ストラウドを満足させるものではない。というも、その想定において、現行の科学理論がうまくいかなくなると考えるのは、新たな経験的証拠の出現によってであり、理論評価の基準をあくまで経験的証拠においているからである。
- ⁸ Stroud, (1984), p. 241 (邦訳 400 頁)
- ⁹ Stroud, (1984), p. 240 (邦訳 399 頁)
- ¹⁰ ストラウドは、被験者の信念を判断するためには、被験者の信念から独立の世界において成り立っている真理を正しく知っていなければならないと考えている。この考察自体は問題がない。しかし、その判定者が知っている真理というものが信念であってはならないと考えているようであるが、その場合、ストラウドが「真理」という語をどのような意味で用いているのかを明らかにする必要があるだろう。
- ¹¹ Quine, (1960), pp. 275-276. (邦訳 459-460 頁)

参考文献

- Quine, W. V. (1960), *Word and Object*, MIT Press (邦訳『ことばと対象』大出、宮舘訳、勁草書房、1984 年)
- Quine, W. V. (1981), "Reply to Stroud" in P.A. French et al ed., *Midwest Studies in Philosophy VII*, Minnesota U. P., 1981, pp. 473-475.
- Quine, W. V. (1992), *Pursuit of the Truth*, 2nd ed., Harvard U. P. (邦訳『真理を追って』伊藤、

清塚訳、産業図書、1999年)

Quine, W. (1998): "Reply to Roger F. Gibson, Jr." In L. Hahn and L. Schilpp (eds.), *The Philosophy of W.V. Quine*. Expanded Edition. La Salle, Illinois: Open Court Press. pp. 684-685.

Stroud, B. (1984), *The significance of Philosophical Scepticism*, Oxford U. P. (『君はいま夢を見ていないとどうして言えるのか』永井均監訳、春秋社、2006年)

成瀬尚志(2007)、「ストラウドによるクワインの自然化された認識論批判の検討」、『アルケー』、関西哲学会、第15号、pp. 117-127.

(なるせ たかし／神戸大学)